

新しい動きに対応した活動の展開

理事長 栗原秀人

6月20日総会の理事改選と臨時理事会を経て引き続き理事長を務めさせていただきましたこととなりました。

仁井さん、渡部さんには長い間、理事として当倶楽部の運営を支えていただきありがとうございました。

お立場を変えながらも引き続きよろしく願いいたします。



石飛さん、那須さん、弓削田さんには新たに理事に就任していただきました。それぞれのご経験と知識を生かされて当倶楽部の発展にお力をいただきたいと思っております。

押領司さんには長い間事務局長を務めていただきありがとうございました。新事務局長の弓削田さんにはどうぞよろしく願いいたします。

新執行体制のもと、会員皆様のご支援ご協力のもと、当倶楽部の更なる活性化を図っていききたいと思います。

さて、国交省においては昨年度からの水道行政移管を踏まえた「上下水道の基本的なありかた検討委員会」を設置し、強靱で持続可能な上下水道を実現するための基盤強化に向けた取り組みとして、「更新投資を適切に行い次世代に負担を先送りしない経営へのシフト」、「官民共創による上下水道の一体的な再構築と公費負担のあり方の検討」などがとりまとめられ、また今年1月の埼玉県八潮市での陥没事故を契機とした「下水道等に起因する大規模な道路陥没事故を踏まえた対策検討委員会」では、「安全性確保を最優先する管路マネジメントへ」について、「上下水道管路の戦略的な再構築方策のあり方」、「下水道等のインフラマネジメントを推進する仕組みのあり方」などが取りまとめられつつあります。

これらの実現のためには、これまでの延長にある発展だけでなく、これまでと違った進め方、すなわち転換がより一層求められてきます。

「一般市民に対して、環境保全についての知識の普及と啓発を行い、環境保全事業の推進に寄与すること」を目的とした当倶楽部の活動を行っていく上で、これまでの知識では追いつかないことが多々生じ、当倶楽部会員も常に進取の気持ちで勉強していくことが大事になってきます。活動の柱の研究集会は基調講演、事例発表、総合討論という定型で行われてきましたが、これからは会員が様々を学ぶ場面としての研究集会、いわゆる勉強会なども逐次開催していく必要があると考えます。勉強会のテーマを皆様から募集するなど、時代の変化に応じた活動の活性化を図っていききたいと思いますのでよろしく願いいたします。

2025 年度活動報告

令和 7 年度通常総会報告

理事・前事務局長 押領司重昭

令和7年度の通常総会が、6月20日にハイブリッド方式（事務局会場/東京都文京区本郷 1-4-1 全水道会館）により開催されました。審議事項は、第1号議案令和6年度事業報告・活動計算書、第2号議案令和7年度事業計画・活動予算及び第3号議案役員改選でした。正会員85名に対し、会場出席27名、オンライン出席4名並びに委任状37名、計68名の出席者数となりました。各議案が事務局長から報告され夫々承認されました。

総会の後に、臨時理事会が開催され、理事長に栗原秀人、副理事長に昆久雄が選出され、両氏は就任を承諾しました。また、事務局長には、弓削田克美が任命されました。役職以外の理事には、秋山礼子(再)、石飛博之(新)、押領司重昭(再)、大貫廣美(再)、大屋弘一(再)、鈴木穰(再)、高橋正宏(再)、中西正弘(再)、那須基(新)、村上孝雄(再)、若狭公一(再)の各氏が、監事には、中尾正和(再)、畑田正憲(再)の両氏が選任されました。(以上、敬称略)

総会後の講演は、中尾正和監事から「海外の下水道事業等」

と題し、ご本人の海外業務の経歴を交えて、海外の下水道に関する技術事情などの興味深い話をさせていただきました。

その後は、近くの居酒屋を貸し切って、懇親会を開宴しました。司会は、秋山礼子理事が担当しました。公益社団法人日本下水道協会の岡久宏史理事長、地方共同法人日本下水道事業団の黒田憲司理事長、一般社団法人日本下水道施設業協会の岩田浩史事務局長をお招きし、祝辞を頂きました。また、国土交通省上下水道審議官の松原誠様からお祝いのメッセージをいただき、代読させていただきました。懇親会は、盛り上がり、新任理事の挨拶を割愛せざるを得ない状況でした。

最後になりますが、この度選任されました理事 14 名、監事 2 名の体制で、これから 2 年間、水倶楽部の運営に努めてまいりますので、会員の皆様のご協力の程、よろしく申し上げます。私事で恐縮ですが、事務局を担当しました 8 年の間の会員の皆様のご協力、ご理解に御礼申し上げます。

2025 年干潟見学会

顧問 亀田泰武

今年は、例年行っている木更津海岸と、ホテル三日月の近くで結構アサリが取れているらしいので、新たに金田みたて海岸について企画した。

金田みたて海岸見学会は 4 / 28 月曜日に実施。お土産用の貝掘り後、漁港寄りの南端から貝が撒かれていないと思われる端の方を沖に向かって調査。

浜はカニらしい穴が多かった。またウミナ類が多く見られた。アサリの生息は木更津とあまり変わらない少なさであった。シオフキが少し存在していた。シオフキは採取されることががなく、貝類の自然の生息状況を示してくれる。干潟見学会報告は <http://www.21water.jp/kl/20250428kengaku/>

木更津海岸見学会は 5 / 27 火曜日に実施。干潟に降り最初に目についたのが去年同様、タマシキゴカイの砂のとぐろで、沖合まで多数分布していた。

調査は潮干狩り場の東隣の、貝が撒かれていないところから始めた。沖の方へ移動しつつ所々掘って調べた。アサリ稚貝とシオフキがは数は少ないが去年より多く存在していた。潮干狩り場柵の沖の方では、コアマモが広く繁殖していて、そのなかで自生と思われる多少大きめなアサリとシオフキがけっこういた。そのアサリ貝殻は木更津にしては相当黒ずんでいた。

見学会報告は

<http://www.21water.jp/kl/20250527kengaku/>

最近家近くのスーパーで千葉県産のアサリが並んでいて、千

葉県東京湾漁業研究所に問い合わせたところ、最近富津と盤州干潟のアサリが市場に出るようになったそうで、どうも金田海岸付近のどこかで取れているようである。



ウミナ類と這い回った線状の模様 金田みたて海岸

新役員自己紹介

石飛博之理事

この度、理事に選任された石飛博之と申します。私は福岡県北九州市出身です。子供の頃はまだ高度経済成長期で、工場地帯から出されるばい煙で空はいつもどんよりとしていて、工場排水で川や海はひどく汚れて悪臭を放っていたことを今でも覚えています。そういう幼時体験もあってか、大学卒業後、環境省



(当時は環境庁)に就職しました。環境省では様々な仕事に携わりましたが、当時は殆どが大気汚染、水質汚濁などの公害対策で発生源の規制強化が主でした。それが、平成の時代になると地球温暖化を始めとする地球環境問題が中心課題となって、私達の社会経済活動そのものの見直しを迫られるようになりました。

また、3 回に亘り厚生労働省(当初は厚生省)に出向して水道行政にも携わりました。その中で絶対に忘れられないのが、平成 23 年に発生した東日本大震災です。地震の規模、範囲の広さにも増して、目を奪ったのが東日本一円を襲った津波による甚大な人的・物的被害でした。しかし、北海道から沖縄県に至る水道事業体が、阪神淡路大震災以来の経験を基に、震災直後から給水車と復旧に携わる職員を被災地に派遣してくれました。水道一家とはこういうことだと改めて痛感し、とても感謝しました。私どもも日本水道協会や関連業界と連携して、応

急給水と応急復旧の支援に努めました。

ただ、東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故に伴う放射性物質の放出は全く想定外でした。その結果、福島県内と関東一円で一時的に水道水の飲用制限を実施せざるを得ませんでした。こうした大災害は二度と起きて欲しくありませんが、インフラ事業を運営管理する者にとっては、起こりうる想定して、いざという時に被害を最小限にして、復旧を早めることを常に念頭に置かなければならないというのが教訓だと思います。

令和6年度に、国の水道行政が厚生労働省から国土交通省と環境省に移管され、上下水道行政が国土交通省で一体的に進められることになりました。上水道と下水道では、機能や施設はもちろん、事業運営の流儀や文化も大きく異なります。その違いをお互いによく理解した上で、優れている点は採り入れたり、融合させたりして、是非とも相乗効果を上げて欲しいと期待しています。

21世紀水倶楽部も、これからの日本の上下水道事業の持続・発展に少しでも貢献できるような活動を進められればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

弓削田克美理事

この度の通常総会で理事に選任、その後の臨時理事会で事務局長に指名されました弓削田克美です。よろしくお願いいたします。

まずはともあれ自己紹介いたします。三十数年務めた日本下水道事業団を一昨年度末に退職いたしました。日本下水道事業団では、設計を皮切りに、施工監理、研修事務と講師、全社事業管理、プロジェクトマネジメント、新技術導入推進、下水汚泥減容化維持管理、設計施工統括、技術開発に携わってまいりました。改めて教えてみると転々とした部署数は17になります。飽きっぽい性格には適合した生活だったようにも今なら思えます。



この中で特に印象が残っている部署が下水汚泥減容化維持管理です。福島第一原子力発電所事故のあとに発生した放射性物質を含んだ汚泥を乾燥処理（2 処理場）と焼却処理（1 処理場）の維持管理に携わったものです。数年間保管した脱水汚泥を、さらに放射性物質を含んでいる汚泥を処理する施設の維持管理ですから、世界でも類を見ない業務に携わったのではない

かと自負しております（きちんと調べたわけではないので正しいかどうかは判然としません。誤った自負でしたら大目に見てください）。この業務は放射線管理を行う企業と設備の維持管理を行う企業とのコラボレーションで行ったもので、それぞれが協業しながら一つの業務成果を上げていく初めての経験でした。

梅雨の今の時期は、梅干しの漬け込みの季節です。昨年に続き今年も紀伊国産の青梅は不作で、米と同様に価格が高騰しています。今年は漬け込み量を減らして漬け込みました。無事梅酢が上がってくれたので、あとは梅雨明け（西日本は早々と梅雨明けしてしまいましたが）後の強い天日に晒すまで、静かに漬けておきます。今年の梅干しの封切りは1年後となります。

話が大きく逸れてしまいましたが、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

会員だより

徒然水草 其之八 「汚泥の汚」

嫌気好気法師

肥料価格の高騰から肥料国産化の方針が打ち出され、下水汚泥の農業利用に追い風が吹いている。従来からの不安要素であった汚泥中の重金属類は、最近ではその含有量は大幅に低下している。しかしながら、依然として、下水汚泥は本当に安全なのかという懸念を持つ人々も多く、汚泥資源利用の大きな障壁となっている。これには、「汚泥」という名称も一つの大きな要因なのだろうと思う。

汚泥という言葉は、古くは「淤」という字が使われていたらしい。貞享版沙石集（1283）には「犯戒の後は（略）わが身は淤泥のごとし」とある。これは「破戒した自分は汚れた泥のようになってしまった」という意味だろう。

我々が関わっている汚泥は、活性汚泥法から出るので汚泥と呼ばれているのだが、活性汚泥自体は細菌主体の微生物群集であり、それ自体、別に汚いものではない。「活性泥」でも良いのではないかと思うのだが、何故、「汚」がついたのだろうか？

そもそも活性汚泥法という用語は、いつから使われ始めたのだろうか？1914年に英国で発明された活性汚泥法が、我国に紹介されたのは1921年（大正10年）のこと。この年の4月に東京帝国大学の草間^{いさむ}偉博士が、土木学会において「最近ニ於ケル下水處理法」と題する講演中で、“Activated sludge”を「促進汚泥法」と訳して紹介されたのが最初らしい。その後、「活性汚泥法」という訳語も使われ始め、1959年に日本水道協会が「下水道施設基準」を制定して、正式に「活性汚泥法」とされた。

促進から活性へと呼び名が変わったものの、「汚泥」はそのまま残ってしまった。*

英語の” Sludge” は、広く泥を指す言葉で、必ずしも「汚なもの」と同義ではないようだが、草間教授はこれを「汚れた泥」と訳された。ここで「汚」の字がついたのが、どうやら、汚泥という名称と、それを巡る苦勞の発端のようだ。

このネガティブな印象の汚泥という名称を何とか変えたいという動きは、これまでもあった。下水道界のアイデアマンであった故Nさんの発案で、汚泥に代わる新名称を募集したことがあった。この時には、緑泥や富貴泥といった、なかなか良さそうな提案が出たのだが、結局、汚泥に取って代わることはできなかった。長年に亘って用いられ、法律でも使われている用語を変えるのは容易ではないのだ。・・・とは言え、なんとか「御泥」くらいにできないものかと思うこの頃である。

* 出典：岩堀恵祐氏「活性汚泥法の誕生とその史的変遷」日本水処理生物学会誌 2022

編集幹事のあと整理

- 栗原理事長は4年前に就任され、二回再任されて現在に至っています。その4年前の [NL69](#) へのあと整理文（号末）での紹介文は変わりません。
- 栗原理事長からの巻頭文「当倶楽部会員も常に進取の気持ちで勉強していくことが大事になってきます」の結語部分に共感します。まずは会員同士の勉強などの活動で、そのあと一般市民へ普及する、というのが順番だと思います。
- 会員同士のその「研究集会」のあとは飲み会という名の交流会、そして、HP でそれら活動成果を PR する、これらが NPO の二大要素です。頻度は技術見学会を含んで毎月1回程度はあったほうがよいと勝手に。
- 新役員自己紹介の那須基理事は都合により次号掲載となります。
- 会員日よりコーナーへの投稿を募集しています。投稿はいつでも受け付けます。直近の号に掲載します。投稿要領などは望月から毎回お出ししている原稿依頼メールをご覧ください。

編集幹事・望月